



公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

 〒104-0061 東京都中央区銀座7-16-12 G-7ビルディング9階  
 ☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

 主な  
内容

- 1~3面 ピンクリボン  
フェスティバル2018
- 6面 金沢市でリレー・フォー・ライフ  
初開催
- 8面 2018年度RFL「プロジェクト  
未来」研究助成決定

## ピンクリボンフェスティバル2018

### 「あなたの一步が、誰かの一步に。」をテーマに東京、神戸で開催 ウォーク、シンポ、ライトアップ

ピンクリボンフェスティバル2018(主催:日本対がん協会、朝日新聞社ほか)が、ピンクリボン月間の10月に合わせて開幕した。乳がんの早期発見・早期診断・早期治療の大切さを伝えることを目的に2003年から始まり、今年は16回目。10月1日に東京都庁前やレインボーブリッジ、明石海峡大橋などでピンク



ピンクのリボンが舞い上がる出発式

ライトアップがされたほか、原宿表参道や神戸・フラワーロードでフェスティバルのパナーが掲示され、街からも乳がん検診の大切さのメッセージが発信された。

9月30日には有楽町朝日ホールでピンクリボンシンポジウムを開催、乳がん専門医や精神腫瘍科医の講演など



神戸の参加者たち

を行った(2、3面に関連記事)。

恒例のスマイルウォークは神戸で10月8日、東京で13日に開催された。神戸では約2100人、東京では約3600人が参加。今年のテーマである「あなたの一步が、誰かの一步に。」と書かれた乳がん検診の大切さを訴えるピンクのゼッケンを身につけ、街中を歩いた後、それぞれの発着会場で乳がん検診についてトークショーが開かれた。

東京の会場となった六本木ヒルズアリーナでは、アーティスト・デザイナーの篠原ともえさんと明石定子・昭和大学医学部乳腺外科准教授がゲストとなり、篠原さんが明石准教授に質問するような形式で進められた。

40代を目前にした39歳で初めて乳がん検診を受けたという篠原さんが「乳がんで最悪の事態になるのを防ぐのはやはり検診でしようか」と尋ねると、明石准教授は「早期発見をできれば9割が治るのが乳がん」と説明。マンモグラフィ検査には痛いというイメージがあるが、月経開始から10日後ぐらいに受ける

など、受診のタイミングを工夫することで痛みが軽減することなども紹介した。

一方、神戸では、お笑いコンビの「クワバタオハラ」と玉木康博・大阪国際がんセンター副院長がゲストとして参加、トークショーなどでイベントを盛り上げた。



東京でウォークを楽しむ参加者たち

**がん相談ホットライン** 祝日・年末年始を除く毎日  
03-3541-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3541-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

**医師による面接・電話相談(要予約)**  
**社労士による就労相談(要予約)**  
予約専用 03-3541-7835

日本対がん協会は医師による面接・電話相談と社労士による就労の電話相談(ともに無料、電話代は別)を受け付けています。予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までです。医師による相談は電話が1人20分、面接は30分、社労士による電話相談は40分になります。詳しくはホームページ(<https://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

# 「私らしく、がんと歩む」 ピンクリボンシンポジウム

東京千代田区の有楽町朝日ホールで9月30日、ピンクリボンシンポジウムが開催された。「私らしく、がんと歩む。」と題して、乳がんの最新治療と心のケアについて、専門医や体験者の講演やトークを行った。

講演は、中村清吾・昭和大学医学部乳腺外科教授と、佐治重衡・福島県立医科大学腫瘍内科学講座主任教授、保坂隆・保坂サイコオンコロジー・クリニック院長の3人。トークには乳がん経験者でもある歌手の麻倉未稀さんが登場し、「乳がんとともに生きること」と題して現在の心境などを語った。

## 自分らしい生き方への治療を

中村教授は「敵を知り己を知らば 百戦危うからず」と題して講演。医師になった1985年当時は年間2万人とみられた乳がん患者が、今は年間推定9万人に増加し、中でも40代後半から50代にかけての閉経後の女性で顕著に増えていることを紹介。8割以上の乳がんが女性ホルモンの刺激の影響を受けるタイプであり、少子化や高齢出産の増加が乳がんのリスクを高めることに影響していることを解説した。

また、乳がんのリスクには閉経後の肥満もあり、栄養状態の変化も乳がん増加の要因になっていることを指摘。食事中の脂質の割合の増加と糖尿病の患者の増加も乳がんの増加とかぶっていることも示し、「糖尿病のリスクを防ぐことが間接的に乳がんの予防にもなる」と語った。

また、マンモグラフィ検診で2cm以下の転移がない段階で見つければ、5年生存率が95%以上で治療成績がいいことを紹介した一方で、「乳がんには早期から転移、再発を起こしやすいタイプとそうでないタイプがあることがわかってきた」と指摘。将来、再発を起こさうでないタイプは慎重に経過観察した方がよいのか、臨床研究が進んでいることを紹介した。

さらに、乳がん検診を個人の発症のリスクに応じて行うための臨床試験が進んでいることも説明。特にBRCA1またはBRCA2という遺伝子に生まれつきに変異がある遺伝性の乳がんを発症しやすい人には、若いときからのMRI検診が勧められていることを解説した。

遺伝子レベルでの研究が進み、がんの個性を正確に診断し、それに応じた治療

が選択できるようになってきたことから、「患者も自分の病気のことを知って、自分の状態を正しく医師に伝えられるかが大事」と指摘。「治療効果の高い薬が今後多く出てくるが、非常に高かったり、特有の副作用があったりする。自分らしい生き方をするには、どんな治療がいいのか、人生観や価値観も含めて考える時代がきている」と語った。

## 標準治療を知って

佐治教授は「乳がんの新しいくすり」と題して講演した。がん細胞だけが持っている部分を標的にして攻撃する分子標的薬が、この1年で14も増えるなど、急増していることを紹介。ただ、新しい薬の使い方には、基準があり、ステップを踏んで「標準治療」となっていくことを説明。「標準治療」は、世界の臨床試験の結果から安全性と有効性が最適と合意されたもので、乳がんでは日本乳癌学会の乳癌診療ガイドラインに掲載されており、参照することを奨めた。

オプジーボで有名な免疫チェックポイント阻害薬は、乳がんに対しては単独では効果が認められてないが、抗がん剤との組み合わせで効果があったという報告が出て光が見えてきたことを紹介。

しかし、免疫チェックポイント阻害薬は効くときは効くが、色々な副作用が出てくるため、「標準治療としての体制が整ってから受けてほしい」と語った。

また、BRCA1またはBRCA2の遺伝子異常がある遺伝性の乳がんに使え



台風の影響にかかわらず、多くの参加者で埋まった会場

るPARP阻害薬という新薬が8月に登場したが、この薬を使うためには遺伝子検査が必要で、遺伝性の遺伝子の検査のため、その正しい説明やカウンセリングをどうするかなどが課題になっていることを紹介した。

## がんになった意味を考え、前向きに

保坂院長は「どう考えたら『乳がんになって良かった』と思えるのか?」と題して講演した。

保坂院長は、乳がんになった人は多くが、「なぜなったんだ」と原因を考えて悩むことを指摘。しかし、乳がんは多因子の疾患で原因はわからないため、そうした患者には「原因探しには何の意味もない。原因より乳がんになったことの意味を考えよう」とアドバイスしていることを説明した。患者にがんになって良かったことと、悪かったことのリストを書いてもらおうと、良かったことを書く方が多くなることを紹介。こうしたことが書けようになるのは告知から3カ月後からだが、がん告知でトラウマ(心的外傷)になってもそれを乗り越えると人への思いやりなど、心の成長が見られるようになることを解説した。

また、「悲観や絶望はがんの再発率を



高め、生存率を下げるのがわかってきた」として、同じことに対しても、見方を変えることをアドバイス。乳がんになっても、「この段階で見つかってよかった」と考えるようにすることを勧めた。「自分の人生のこの時期になぜがんになったのかを、いい機会になったと思えるようになった人は、穏やかな生活に変わっていく」と語った。



トークする麻倉さん

**麻倉未稀さん  
「がんになっても元気で生きられる」**

続いて、昨年4月にテレビ番組の企画で人間ドックを受けて乳がんが見つかり、昨年6月に手術を受けた歌手の麻倉未稀さんが登壇し、その経緯や思いについて語った。

麻倉さんの乳がんがわかったのは昨年だが、10年以上前に、乳房に血栓ができてTシャツが血で真っ赤になったことがあった。その時診察した医師から、「がんがあってもおかしくない」といわれ、3年間はマンモグラフィ検査や超音波の

検査を続けだが、がんは見つからなかったため、その後は検診にも行っていなかったという。一昨年に胸に違和感を感じたが、忙しくて人間ドックにも行けなかったとき、テレビ局から人間ドックの話がきて、受けたらがんが見つかった。

将来の計画などがあったときにがんがわかって悩んだが、「これはいい機会なので、すべてを捨ててしまおうと思うようにすると、気持ちが楽になった」と振り返った。

昨年6月に手術し、3週間後には歌の仕事再開。その後、山口県へ患者向けに講演にいった時にヒット曲の「ヒーロ

ー」を歌うと、来場者から「前向きに生きようと思った」といわれ、「これが私のミッションと思った」と語った。

「乳がんをわずらっても元気で生きられることを、乳がんをわずらって初めて感じた。逆に引込み思案に思ってもそのままでももらいたい。そうするといつかは明るく生きられる」と参加者にメッセージを伝え、最後に「ヒーロー」を歌ってしめくくった。

一方、会場には患者支援団体などが各種ブースを出展した「ななかまcafé♪」も設置され、患者向けのダイエット講座などのミニセミナーや、リンパ浮腫をケアするエクササイズの実演などもされた。



ミニセミナーも開かれた「ななかまcafé♪」の会場

# 第14回ピンクリボンデザイン大賞決定



審査員となった篠原さんと、受賞者。左から木嶋さん、成田さん、岩永さん。

点に篠原ともえ特別賞が贈呈された。

ポスター部門グランプリは東京都の岩永雄さん(33)、コピー部門グランプリは大阪府の成田斐さん(26)、「篠原ともえ特別賞」は千葉県

の木嶋拓巳さん(20)がそれぞれ受賞した。

岩永さんと成田さんにはクリエイティブディレクターでコピーライターの中村禎審査員長から表彰状が渡され、木嶋さんには、篠原さんが表彰状を贈呈した。

ポスター部門グランプリ作品はポスター化し、交通広告や雑誌広告などに活用される。

13日のスマイルウオーク東京の会場で、第14回ピンクリボンデザイン大賞の表彰式が行われた。今年もポスター部門とコピー部門の2部門を設け、ポスター部門797点、コピー部門1万3180点の総計1万3977点の応募の中から、各部門のグランプリ1点ずつ、入賞作品12点が選ばれたほか、ポスター部門1

**コピー部門グランプリ**

**女の勤は、誤診する。**

成田斐さん(26歳) 大阪府

**ポスター部門グランプリ**



岩永雄さん(33歳) 東京都



# ラルフ ローレンが「ピンクポニーウォーク」を開催 啓発イベントも



神宮外苑グラウンドからスタート



街を歩く参加者ら

ラルフ ローレン株式会社(東京都千代田区)が、がんの早期発見、診断、治療に関する知識向上、医療格差の改善を目的に世界各国で行っている「ピンクポニーキャンペーン」のイベントのひとつである「ピンクポニーウォーク」を10月17日に開催した。

「ピンクポニーキャンペーン」は、ピンク色のポニーやロゴをTシャツなどにあしらった限定商品を販売し、売り上げの一部を世界各国のがん啓発団体などに寄付する活動で、日本では日本対がん協会を寄付先とし、2003年から継続して支援していただいております、今年で16年目を迎えた。

このうち、ウォークは08年から毎年続けられており、今年は東京の明治神宮外苑グラウンドをスタートし、表参道と原宿を経由して戻り約4.5kmのコースで実施された。同社の社員とその家族らがピンクポニーのTシャツを着て街を歩き、がん啓発を行った。

今年はさらに、ウォーク開催が10

周年にあたることを記念して、10月6日に東京・恵比寿ガーデンホールで、10月16日に東京・ラフォーレミュージアム原宿で、それぞれ一般女性を対象にした乳がん予防の啓発イベント「Pink Pony with workout」も開催された。

恵比寿の会場ではモデルでクロスフィット・トレーナーのAYAさんを、原宿の会場ではモデルでヨガトレーナーのSHIHOさんをゲストに、岸田浩美・日本対がん協会マネージャーと乳がん検診の大切さについてトークショーなどが行われた。



Pink Pony with workoutの原宿会場では、SHIHOさんのトークショーやヨガのレクチャーもされた

## 東北楽天ゴールデンイーグルスの嶋基宏選手

### 今年もヒット数分をピンクリボン活動へ寄付



ピンクリボンフェスティバルの公式メッセンジャーのモモ妹も参加した贈呈式

東北楽天ゴールデンイーグルスの嶋基宏選手によるピンクリボン活動への支援寄付金の贈呈式が10月17日、仙台市の楽天生命パーク宮城室内練習場で開かれた。嶋選手からは、2015年からヒット1本を記録するたびに1万円を日本対がん協会に寄付をいただいている。17日は、今年度のヒット本数分65本だったため、65万円の目録が坂野康郎・日本対がん協会常務理事に贈呈され、坂野常務

理事から感謝状が嶋選手に贈られた。

嶋選手がピンクリボン活動に興味を持ち、支援を続けていただいているもので、嶋選手からの寄付は2015～18年シーズン合計で、249万円(ヒット249本)となった。

嶋選手は「こういう活動は毎年続けることに意義がある。来シーズンは100万円に届くよう頑張りたい」と話していた。



# しあわせピンクバスプロジェクト

## 全国165施設のお風呂がピンクに 乳がん検診啓発の掲示も

お風呂をピンクにして乳がん早期発見の啓発をすることを、銭湯など入浴剤利用施設に呼びかけた「日本列島しあわせピンクバスプロジェクト」が、ピンクリボン月間の10月中、展開された。

名古屋市の入浴剤メーカーの株式会社ヘルスビューティー(松田尚子社長)が事務局となって、ピンクの入浴剤と、乳がんのセルフチェックの仕方がわかる浴室内の乳がん早期発見の啓発掲示物などをセットにして販売し、全国の入浴施設などでピンクリボン運動

を発信していく試みで、趣旨に賛同した北海道から沖縄までの165の入浴施設が参加。期間中、湯船をピンクに染めたり、人工乳房を展示したりするイベントが実施された。

プロジェクトのサイト(<https://pinkbath.health-c.com>)も置かれ、参加施設の活動などが報告された。この中では、参加施設の店長が、入浴客に入浴時のセルフチェックを呼



湯船がピンクに染まり、セルフチェックのポスターも貼られた愛知県江南市の天風の湯。

ん検診の受診体験記なども掲載され、乳がん検診の受診を促した。

## ピンクペイント運動が全国組織に

### 全国20の塗装、塗料事業所が参加



ピンクペイント運動ネットワークに参加した事業所メンバー

全国の塗装、塗料に関する事業所が、乳がんの早期発見、早期診断、早期治療の大切さや患者支援を啓発するピンクリボン運動を支援しようと、「全国ピンクペイント運動ネットワーク」

が設立され、9月17日名古屋市で設立総会が開かれた。

岐阜県関市の有限会社三輪塗装(三輪雄彦代表取締役)が昨年12月から、一戸建て住宅の屋根外壁塗装の施工面積の1㎡あたり10円をピンクリボン活動に寄付するピンクペイント運動を進めていたが、その活動を全国に広めようと、三輪さんが全国の同業者に呼びかけたところ東北から九州までの

20の塗装業者が活動の趣旨に賛同し、ネットワークに参加した。

ネットワークでは、屋根外壁塗装の施工面積の1㎡あたり10円という枠にとらわれず、参加した業者が各々の基準で寄付活動を行うとともに、ピンクリボン運動の理念を広げる勉強会、チャリティイベントなどの開催、啓発ポスターなどの作成を予定している。

ネットワークの理事長となった三輪さんは「ピンクリボン活動を支援することで、業界としても社会貢献をさらに進めていきたい」としている。

## がん教育 2017年度は小中高の約6割が実施

### 文部科学省が初の全国調査 外部講師の活用は約1割

文部科学省は10月23日、全国の国公私立の小中学校、高校のうち、約6割の学校が2017年度にがん教育を実施したとする、初の全国調査の結果を公表した。

調査は、各都道府県、政令指定都市の教育委員会などを通して全国の国公私立の小中学校、高校、特別支援学校などを対象に2017年度のがん教育の実施状況を聞いたもので、3万7401校からの回答をまとめた。その結果、2017年度にがん教育を実施し

た学校の割合は、56.8%(2万1239校)で、このうち、小学校では52.1%(1万771校)、中学校では64.8%(7192校)、高校では58.0%(3276校)だった。

がん教育の実施方法では、「体育・保健体育の授業」が92.9%(1万9728校)、「特別活動の授業」が7.4%(1562校)、「道徳の授業」が2.9%(611校)などと続いた。がん教育を実施した学校のうち、外部講師を活用した学校は12.6%(2676校)だった。活用した外部講師の職種は「がん経験者」が20.8%(557

校)と最も多く、次いで「がん専門医」が17.0%(454校)、「薬剤師」が14.6%(392校)、「学校医」が13.4%(358校)、「保健所職員」が9.9%(266校)、「その他の医師」が6.7%(179校)、「保健師」が5.8%(154校)、「がん関連団体等職員」が4.8%(129校)、「看護師」が3.6%(95校)の順だった。

文部科学省では小学校では2020年度から、中学校では21年度から、高校では22年度からがん教育を全面实施する方針を示している。

# 石川県でリレー・フォー・ライフ初開催

## Shake Hands ～希望の光～

リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)は9月から11月にかけてピークシーズンを迎えたが、今年は台風が多く、中止や時間短縮での開催を余儀なくされたところが目立った。今年初開催となった金沢市での「RFLJ2018石川」もそのひとつだった。昨年11月に29人で実行員会を発足し、開催にむけて14回の実行委員会を重ねてきたが、台風24号の接近で、やむなく2日目の日程を中止。9月29日正午から午後8時までの短時間開催となったが、初開催にこぎつけ、希望の想いをつなげた。

「RFLJ2018石川」の会場は、金沢市中心部に位置するいしかわ四高記念公園。旧学舎で国指定重要文化財でもある赤煉瓦造りの石川四高記念文化交流館があり、多くの木々や休養広場などを備えた、学舎と緑が共存する公園だ。

小雨のなか始まった開会式。金沢市出身で自身もがんサバイバーである堀均実行委員長とがんサバイバーらが手にするサバイバーズフラッグを先頭に、ルミナリエバッグの並ぶコースを一周するサバイバーズラップで開幕した。

ステージでは和太鼓やダンス、就労支援トーク、ヨサコイ、副実行委員長で石川県済生会金沢病院緩和ケア病棟長、石川県がん安心生活サポートハウス所長の龍澤泰彦さんらによる『がんよろず相談劇』などが行われた。また、各テントではがんの早期発見・治療やヘアドネーション、健康に関する情報発信、ハンドネイル、マッサージ、チャリティグッズ販売などが行われ、がん征圧の寄付を募った。

### 思いが詰まったテントブース

ボランティアやテントブースには学生や若者の姿が多くあり、そのなかに「Health+」という20代前半の理学療法士4人による整体ブースがあった。元々違う病院に勤務し、リハビリを受



サバイバーズラップで開幕

ける患者と日々接するなか、つらい治療のなかでも痛みが取れ笑顔になる患者と出会ってきた。痛みが取れるだけでもより良く生活を送れるのではないかと、痛みに苦しむ人を助けたいという思いが共通し、今は金沢市内で理学療法に基づく施術を行う整体院を4人で開いている。今回は実行委員のメンバーから声が掛かり参加した。

サバイバーズトークで自身の経験を語った実行委員の荒野里美さんは、9年前の38歳の時、体調に違和感を覚えたが「何でもない」という安心感を得たくて病院へ行き、乳がんの診断を受けた。この時、子どもは小学3年生と6年生。看護師資格をもち、普段から食には気を付け、健康が取り柄だった。「がん=死」が頭を過り、一人になると涙がでた。手術までのあいだは自分が亡き後を考え、洋服や本など要らないものを捨て続けた。手術は成功し、抗がん剤、抗ホルモン剤、放射線治療を行った。排水口に溜まる抜けた髪の毛を見た時のショックは大きかった。なかでも辛かったのは、薬の副作用により気分が落ち込んだ5年間で、人生を振り返り考えながら暮らすよう

になったという。子どもの頃は先生になりたかった。今は自身の経験を生かし、石川県がん安心生活サポートハウスで、スープの会を開き、食が進まないときに少しでも口にできる料理を教えている。

この場にいたインターンの男性は「病院で患者さんの気持ちの揺れ動きや、退院後の様子を聞くことはなかなかない。話を聞いてよかった。様々な場で役立てたい」と語った。

### 『ツナグココロ』とShake Hands

今回のテーマソング『ツナグココロ』は金沢大学附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科の野田昌生医師の作詞・作曲。自身の母もがんサバイバーであり、病棟で日常的に患者と接するなかで感じた思いをつづった。学生時代からアカペラやギターで慰問コンサートを行い、訪問先では笑顔で喜んでもらった。医師と患者という立場でなくても出来ることがあると感じているという。

今回の参加者は約1200人、24チーム。実行委員のうち、がんサバイバーは2名。地元開催を終えた堀実行委員長は「初めは士気が高まるのか不安だったが、メンバーはとてもバイタリティがあり、天候以外は上出来の初開催だった。来年は24時間開催したい」と語った。

閉会時にはエンブティテーブルに火を灯し、幻想的に光るルミナリエの道を歩くサイレントウォークで閉幕。短時間ではあったが、開催テーマの通り、手をつなぐ内容だった。

(日本対がん協会広報 渡辺奈保子)



『がんよろず相談劇』



サイレントウォークで閉幕



# 特定健診・がん検診 未受診者に電話で呼びかけ

## 鳥取県が「健診受診勧奨センター」設置

### 鳥取県保健事業団(日本対がん協会鳥取県支部)が受け皿に

市町村が実施する健診の受診率向上を図るため鳥取県は「鳥取県健診受診勧奨センター(コールセンター)」を設置し、10月23日から業務を始めた。勧奨の対象は特定健診の未受診者で、電話や文書で受診を呼びかけ、同時にがん検診の受診も勧める。勧奨によって増えた分は、個別の医療機関のほか、同県保健事業団(日本対がん協会同県支部)の集団健診が「受け皿」になる。同県が3年計画で策定したモデル事業で、受診者が増えれば他の自治体に広がりそうだ。

県内19市町村のうち、まず岩美、琴浦、湯梨浜の3町が参加した。同県は勧奨の対象者の選定等を市町村の実情に応じてきめ細かくサポートしながら他の市町村に拡大する方針だ。

3町で勧奨を予定する未受診者は計約2000人。全く健診を受けたことがない住民や、ここ数年で不定期ながら受けたことのある住民など、勧奨の対象者は、3町それぞれの要望に応じて決めた。不在で通じない場合には1人につき最大3回まで電話をかける。

10月23日に電話をかけ始めたのは岩美町。未受診者には、個別健診のほか、保健事業団による集団健診を案内したところ、同31日のある地区の集団健診では特定健診の受診者は同じ地区の昨年の受診者を約10人上回る73人(後期高齢者の健診を含む)。胃がんや肺がんの検診受診者も10人程度増えた。保健事業団は胃がん検診車を1台増やして2台で準備。「1台のままできつかった」と話す。

11月以降、勧奨する地域を琴浦、湯梨浜両町に広げる。

勧奨でどれくらいの未受診者が受診するのか、予測するのは難しいものの、県から業務を受託した株式会社キャンサーズキャン(東京都品川区)によると、他の地域での文書等を用いた勧奨の実績から、3~5ポイントの受診率向上が見込める、という。

同県が受診勧奨センターを設けたのは、国民健康保険(国保)の運営主体が市町村から県に移管されたことが背景になった。同県の2015年度の特定健診の実施率(受診率)は市町村国保が31.7%。各種の共済組合(80%以上)や協会けんぽ(45.5%)と比べて低い。

この引き上げを目指して同県は今年度の当初予算で885万9780円を計上して受診勧奨センターを計画。公募を経てキャンサーズキャンに業務を委託した。電話勧奨にはコールセンター業務に実績のある日本ATMヒューマン・ソリューション株式会社(東京都港区)があたっている。

保健事業団のここ数年の受診者は、住民健診ではほぼ横ばいだが、がん検診では胃、肺、大腸、乳の各がん検診は減少している。保健事業団は、受診勧奨にあわせて集団健診に配置する検診車を増やすなどして対応する。

康保険組合・共済組合には後期高齢者支援金の加算・減算を段階的に導入したりするなど、「メリハリ」をつけた政策を進めている。

その評価指標となるのが、特定健診・保健指導、がん検診、糖尿病の重症化予防など。厚労省は国保特別会計からの補助金を使って特定健診やがん検診の受診率向上を促している。

キャンサーズキャンは、ソーシャルマーケティングの手法をいかしたがん検診や特定健診の受診率向上対策に実績があり、全国の自治体から業務を受託している。

ただ、自治体と協力して受診率向上策に取り組み、特定健診やがん検診の受診者が増えても、増えた受診者に対応できるだけの「受け皿」を準備しておくことが欠かせない。健(検)診機関と協議をしないまま勧奨を行い、増えた受診者で会場が混雑し、受診までに長時間待たされるなどして苦情が自治体に相次ぐといった混乱も起きたことがあるという。

日本対がん協会では、各支部、自治体、国保、同社と連携を密にし、各支部の集団健(検)診が「受け皿」となるようサポートを進め、受診者の減少に歯止めをかけたいと考えている。

(小西宏・日本対がん協会がん検診研究グループマネージャー)

#### 受診者減少に歯止め 支部を支援へ 対がん協会

特定健診は、2008年度に導入され、医療保険者に実施が義務づけられた。

対象者(2016年度)は5360万人で、受けた人は2756万人(実施率51.4%)。厚生労働省は実施率70%(2023年度)を目標に、国保の引き上げを図るために保険者努力支援制度を設けたり、健

#### 古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

**charibon** by VALLE BOOKS

詳しくは「チャリボン」

<https://www.charibon.jp/partner/JCS/>

お問合せ(株式会社バリュブックス): 0120-826-295  
受付時間: 10:00-21:00(月~土) 10:00-17:00(日)

# 応募総数67件から20件を採択 2018年度RFLJ「プロジェクト未来」研究助成 決定

リレー・フォー・ライフに寄せられる寄付を基にがん研究を支援する「リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)プロジェクト未来」の、2018年度の採択者が10月15日に決定した。

希望を実現するために、画期的ながんの治療法や患者のQOL改善などを目指す日本国内の研究を助成するもので、今年で7回目となる。同助成金審査委員会での審査、ならびに日本対がん協会理事会の承認を得て決定した。

応募総数は67件で、I分野(基礎研究・臨床研究)が49件の中から10件、II分野(患者・家族のケアに関する研究)が19件の中から10件、あわせて20件が採択された。採択者と研究テーマ、助成金額は下表のとおり。

## 分野 I (基礎研究・臨床研究)

(五十音順、敬称略)

申請者名	所 属	申 請 テ ー マ	助成金額
石本 崇胤	熊本大学国際先端医学研究機構 消化器がん生物学	スキルス胃がん腹膜播種に対する細胞間ネットワークを標的とした新規薬物療法の開発	100万円
加藤 洋人	東京医科歯科大学難治疾患研究所 ゲノム病理学分野	がん浸潤B細胞の個性に着目した新しいがん免疫療法の開発	130万円
國本 博義	横浜国立大学医学部 血液・免疫・感染症内科	炎症性サイトカインを介したクローン造血の拡大機序に基づく新規白血病予防法の創成	120万円
櫻井 雅之	東京理科大学生命医科学研究所 分子病態学研究所部門櫻井研究室	DNA:RNA対合鎖のDNAアデノシン脱アミノ化編集によるDNA塩基置換機構とがん発症機構の解明	100万円
佐藤 和秀	名古屋大学高等研究院医学系研究科 病態内科学講座呼吸器内科	悪性中皮腫の制圧を目指して:光を用いた悪性中皮腫のターゲット治療診断システムの開発	100万円
鈴木 拓	札幌医科大学医学部 分子生物学講座	ヒストン修飾を標的とした多発性骨髄腫の個別化治療法の開発	100万円
増田 万里	国立がん研究センター・研究所 細胞情報学分野・連携研究室・増田グループ	骨肉腫患者に新たな治療選択肢を;TNIK阻害剤による骨肉腫分化転換誘導を介した新規治療薬の開発	100万円
盛田 大介	信州大学医学部小児医学教室 信州大学バイオメディカル研究所	小児がん経験者に対する遺伝性がん関連遺伝子パネル検査、及びがん素因に基づく包括的二次がんスクリーニング	100万円
山家 智之	東北大学加齢医学研究所 非臨床試験推進センター心臓病電子医学分野	舌がん患者でも、食事を楽しみたい=世界初の完全埋込型人工舌の発明	100万円
渡邊 すぎ子	大阪大学微生物病研究所 遺伝子生物学分野	細胞老化に伴う細胞質内DNA応答機構と発がん促進に関わるゲノム不安定性の関係解明	100万円

以上10件 合計1050万円

## 分野 II (患者・家族のケアに関する研究)

(五十音順、敬称略)

申請者名	所 属	申 請 テ ー マ	助成金額
市村 崇	がん研究会有明病院 消化器化学療法科	がん患者の子供に対する心理的・社会的支援システムの開発(2年目)	50万円
上別府 圭子	東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻家庭看護学分野	成人がん患者におけるSNS上の患者会参加状況が孤独感に与える影響	40万円
久芳 さやか	長崎大学大学院 移植・消化器外科	乳癌化学療法におけるステロイド含有含嗽薬の口腔粘膜炎症予防効果に関する検討(多施設共同第2相試験)	40万円
櫻木 範明	小樽市立病院	効果的子宮頸がん検診システムの確立についての研究-自己採取検体による16、18型判定HPV検査の有用性~	50万円
津村 麻紀	法政大学現代福祉学部 臨床心理学科	総合病院のがん医療に携わる心理職の専門教育に関する研究	40万円
殿山 希	筑波技術大学保健科学部 保健学科	がんサバイバー、各ステージのがん患者、医療従事者、介護家族向けマッサージプログラムの作成とエビデンスの構築:Hospital-based massage therapy for cancer careの確立を目指して	40万円
平山 貴敏	国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科	AYA世代がん患者の交流サロン『AYAひろば』の開発	40万円
藤森 麻衣子	国立がん研究センター 社会と健康研究センター健康支援研究部	若年がん患者の支援に関するニーズ調査	40万円
水野 道代	筑波大学医学医療系	がん体験者の自己管理を中心とするQOLを踏まえた継続支援プログラムの構築	70万円
分田 貴子	東京大学医学部附属病院 乳腺・内分泌外科	非医療者による院内外見ケアサービス推進に向けた患者意識の解析	40万円

以上10件 合計450万円